

今治歴史散歩

大成 経 凡

今治の埋もれた、魅力ある歴史文化を紹介するコーナーです。第二十回は、今治市が世界に誇る建築家・丹下健三氏（一九一三～二〇〇五）を紹介し、氏が少年時代を過ごしたころの今治を歴史散歩したいと思います。

第二十回 丹下健三と今治

●隈研吾と丹下健三

二〇二〇年東京五輪・パラリンピックの主会場となる新国立競技場の設計は、隈研吾氏の案に決まりました。隈氏は亀老山展望台（吉海町、一九九四年）を設計した建築家でも知られ、そこはしまなみ海道を代表する全国の観光スポットです。

その隈氏が建築家を志そうとした転機が、小学四年生の一九六四（昭和三十九）年東京五輪で見た代々木第一体育館でした。同館は屋内総合競技場として使用され、東大寺を意識した二重の吊り構造などに、日本の伝統が取り込まれていました。世界が注目する祭典で、同館は日本の近代建築のレベルを

世界トップクラスに引き上げた最高傑作とも評され、この設計者こそ丹下健三（以下、健三）でした。



丹下健三

●丹下家と今治経済界

健三は、大正二（一九一三）年に父・辰世が勤める住友銀行の関係で、大阪府堺市に生まれます。しかし、父の転勤で中国へと渡り、物心ついたときは上海のイギリス租界に住んでいました。自伝『丹下健三〜一本の鉛筆から〜』（一九九七）によれば、その景観はロンドンの町並みに酷似し、洒落た印象は生涯その記憶のなかにあったようです。それが一転、健三が小学二年生のとき、父は同行を辞めて郷里・今治へ移り住むことになりました。

丹下家は今治藩士族の出で、父の兄・辰雄は今治商業銀行（以下、今商）と株興業舎の重役を兼ねる今治経済界の要職にありました。今商は今治地方最大の金融機関で、綿織物業が盛んな四国のマンチェスター・今治の経済を下支えしていたのです。一方、

興業舎は西日本有数の綿ネル会社で、オーナーの柳瀬家が信頼を寄せるのが辰雄でした。ただ、辰雄が大正六年に病没すると、周囲の期待もあつてか、それらの業務を辰世が継承することになります。

健三は大正十五年に今治第二尋常小学校を卒業し、旧制今治中学校へ進学。昭和五（一九三〇）年に飛び級で旧制広島高校へ進学するまでの多感な少年時代を今治で過ごします（螢雪会名簿では今中二十五回生、昭和六年三月卒業）。建築家を志すきっかけは、広島高校時代に近代建築の巨匠ル・コルビュジエの影響を受けたことでした。



日銀の特別融資を今治港棧橋で受け取る丹下辰世（前列右端）
[写真／伊予銀行所蔵]

当時の今治は、大正九年に四国で六番目、愛媛で二番目の市制をしき、同十一年には四国初の開港場に指定されるなど、四国有数の商工都市として賑わっていました。また、大正十三年の国鉄今治駅開業に合わせ、駅と港を結ぶ一〇間幅の街路「広小路」の整備にも着手し、都市計画にもとづくインフラ整備を進めていました。後に健三は都市計画家でも名を馳せますが、その素地は少年時代の記憶にあったのかも知れません。

ただ、昭和二年に全国で吹き荒れた金融恐慌で、辰世の今商は七か月間の休業に陥ります。綿糸相場の暴落が大きな引き金となったのです。重役陣は私財を投げ出すなどして、日銀からの特別融資を取りつけ、父は常務取締役の立場で再建にもかかわらず、その知らせを受けた健三（当時、東京帝国大学大学院生）が今治へ急行する際、尾道で広島原爆投下を知ります。さらに、帰宅して待っていたのは母・テイの死でした。五日深夜から六日未明の今治空襲で自宅（別宮地区）は焼失。この空襲でテイを含め、少なくとも四五四名が亡くなり、市中心市街地の多くが焼野原となりました。

●『世界のタンゲ』と今治

敗戦後、今治市は市役所前ロータリーを基点とする戦災復興都市計画を進め、広小路は現在の二〇間幅（三六m）に拡張されました。同じころ、被爆地の広島では、平和記念公園の設計を健三が手がけ、原爆ドームの保存を実現させました。平和記念資料



昭和55(1980)年11月、市民有志主催の文化勲章受章記念祝賀会に出席するため、今治へ帰省した丹下健三。母校の美須賀小学校児童が今治港でお出迎え
〔写真／今治市立吹揚小学校提供〕

館（一九五二）は、打ちっぱなしのコンクリートで垂直（柱）と水平（梁）の美学が表現され、世界を驚かせました。そこで、今治市は新しいまちのシンボルとなる新庁舎・公会堂の設計を健三に依頼し、昭和三十三年（一九五八）年にそれらは竣工します。公会堂は、折り紙のように折れ曲がった折板構造の壁と屋根に特徴が見られます。市民会館（一九六五）・市庁舎別館（一九七二・一九九四）や愛媛信用金庫今治支



丹下建築が群をなす今治市役所本庁舎周辺

店（一九六〇）・常盤町支店（一九六七）、今治商工会議所・今治地域地場産業振興センター（一九八五）も健三の設計です。後に、健三は建築界のノーベル賞とされる「プリツカー賞」を日本人で初めて受賞しますが、昭和五十七（一九八二）年には今治市から名誉市民を授与されます。健三は平成十七（二〇〇五）年に九一歳で亡くなり、葬儀は自らが設計した東京カテドラル聖マリア大聖堂でいともなわれました。